

マドリードの街並みに見る オルテガ・イ・ガセットの追憶

小 山 義 博

1. はじめに

本稿ではスペインの哲学者、オルテガ・イ・ガセット (1883-1955) の生涯をマドリードの街並みと関連付けてどのようにその街並みがオルテガのイメージを内包し続けているのかについて筆者の訪問レポートとする。オルテガの生涯について詳しく書かれた伝記は数多くあるが、概ねオルテガの生涯を年代順に記し、家族や友人、弟子たちとの交流が中心である¹⁾。また、マドリードの街並みと関連づけたものは、管見の知る限り、J・Z・ボニージャ監修による『Guía del Madrid de Ortega』(2011)²⁾と日本では渡辺修の『オルテガ一人と思想138』(1996)に多少みられる程度である。したがって本稿では、没後に絞ってオルテガ死亡時の新聞記事に注目し家族や友人、弟子たちではなく市民とのかかわりを紹介したうえで、オルテガが住んでいた家々と関連する場所の説明をする。

2. ABC紙「オルテガ追悼特集」

オルテガは1955年10月18日に亡くなり翌日に葬儀が行われ、その様子は各紙が報道している³⁾。なかでも19日のABC紙では追悼特集が生まれ、翌20日付でも記事が掲載されている。特集ではオルテガの生涯と著作の紹介がされたうえで、弟子のJ・マリアスやX・スピリら多数の関係者による寄稿と訃報を受けた世界各国の反応を掲載している。なかでも、オルテガが晩年に住んでいた家の守衛、J・グティエレスにインタビューがされ、「守衛から見たオルテガ」と題して掲載されているのが注目される。

Q 長い間このマンションで守衛をしているのですか？

そうですとも。ドン・ホセがこのマンションに引っ越してきてからと言うもの見ない日はないですよ。そうね、すでに9年になりますか

ね。オルテガさんが亡くなったのがまるで嘘の様です。

Q 最後にオルテガ氏を見かけたのはいつですか？

オルテガさんに挨拶したのは…オルテガさんが病院に行くときですね。その時は階段をご自身の足で降りられていたので、まさか体調が芳しくないとは疑いもしませんでしたわ。そして…オルテガさんが担架に横たわって私の前に戻ってきたのよ。思い出したくもないわよ！その後、途切れることなく電報や手紙が至る所から届いたんです。

Q オルテガ氏との一番の思い出は何ですか？

沢山ありますとも！誰とでも分け隔てなく話すことが好きだったのよ。数年前に主人を亡くした時なんかは、オルテガさんが講演でドイツに行っていて、ローサ夫人がそのことを伝えてくれて、電話でオルテガさんが、主人が亡くなったことが信じられないと言ってくれたわ。オルテガさんが帰国するとすぐに私にお悔やみを言いに来てくれてね、「死」は人間の宿命だよ」なんてね。励ましてくれたわ。それ以降、19歳になる私の娘と時々話をしていたわ。ある時なんて、オルテガさんは娘に「いや～君を映画に誘いたいんだけど、なにせ時間が取れなくてね」なんて言うてましたっけね。

Q オルテガ氏は守衛のあなたと話す機会が多くあったのですか？

場合によりますね。私はオルテガさんが出かける際にお会いするのが好きだったの。年齢を感じさせないほど、とても軽快に歩いて西欧評論社に行っていましたよ。帰宅時に、エレベーターが“使用停止”の表示が時々点灯してね、「オルテガさん、あなたはこのエレベーターが時々こうなるのをご存じでしょ？」と、なぜか私はオルテガさんに「貨物用エレベーターを使ってちょうだい」と言ってしまったのよね。でもね、オルテガさんは文句も言わずにいつも笑顔で受け入れていましたわ。

Q いつオルテガ氏が、体調が悪いと気づいたのですか？

夏の終わりですかね。どこか体調が悪そうだと思いましたが、そこまで重大だとは思いませんでした。(ABC, 19, 10, 1955「Ortega y Gasset,

visto por su portera」より)。

そもそもオルテガはジャーナリストの家柄に生まれ、自身もジャーナリストとして活躍するうえで、サロンで知識人との談笑を日課にしていたほどであるため、当然オルテガにまつわるエピソードは前述の通り友人や弟子、当時の知識人らとの交流に焦点が当たっていた。したがってこのインタビューは、ある一定の社会階層の人たちとしか交流しないと捉えかねないオルテガの意外な一面を、守衛とのやり取りを通じて垣間見ることができる貴重な資料である。こうした19日付の特集が組まれた背景には、C・ドミンゲスによれば、弟子のひとりであったX・スピリが、オルテガが亡くなった日にすぐさまABC紙に「オルテガ追悼特集」の掲載を働きかけたことが大きいとされる (Chamizo Dominguez 2002: 39)。また、その翌日20日に改めてABC紙は以下のように伝えている。

昨日午後12時、サン・イシドロ墓地でキリスト教に基づいてオルテガ・イ・ガセット氏の遺体が埋葬された。埋葬は11時からと告知されていたにもかかわらず、9時半に大勢の市民が故人の家の周りに集まったので1時間後、静寂の中、人で埋め尽くされたモンテエスキンス通りから移動するのは困難であった。午前中の雲ひとつない快晴の空気の中、厳かで悲しみに包まれていた。到着した数千人がジェノバ通りまで埋め尽くした。(…) スルバノ通りからカスティリャーナ通りに下りた一行は、そのままレコレトス通りをブラド美術館、アトーチャ駅、そしてトレド門を通過してサン・イシドロ墓地に向かった。マドリードの街並みに見られた葬列は印象的であった。道路清掃人、市電の従業員、タクシー運転手のようなもともとオルテガとは対照的な人たち、そして歩道に集まった人ばかり、彼らはマドリードをこよなく愛した偉大なマドリード人オルテガの陰影を胸に刻み、敬意をもって最後の別れをした。(ABC, 20, 10, 1955)

これらABC紙の19日・20日付の内容からも、オルテガとは縁遠い職業の人々までもがその死を悼み、その光景が印象的にまで映ったことは、あまねく人々にオルテガは影響を与えその死を迎えられていたのが分かる。したがって、オルテガの死を弔う大衆が押し寄せた事実を前にして小山が

「少数者と大衆を越えた社会階級に依存しない平均人による、祖国の偉大な哲学者の死を純粹に弔うものであったと感じたい」(小山 2015: 24)と懸念したことは、取り越し苦勞であったといえる。くわえて、偉大な人物を失った影響は、当時の学生たちに大きな影響を与え新たな動きをおこなう誘因となった⁴⁾。オルテガの死後3日後には、旧市街にあるサン・ベルナルド通りに位置するマドリード大学法学部の学生たちがサン・イシドロ墓地まで月桂冠を携えて行進している (Gregorio Morán 1998: 522; Pablo Lizcano 1981: 120)。

このように、オルテガの死はあらゆる世代や階層に影響を与えていることが分かったが、そしてその影響力は報道や映像によってマドリードの街並みに内包されている。

3. マドリード・オルテガ巡礼

3.1 オルテガが住んでいた家々

筆者は2013年10月17日にはじめてマドリードを訪れ、以降2018年まで毎年訪問しオルテガに関連する場所を見てまわった。まず、生家はアルフォンソ12世通り4番地に位置し、没後25周年を記念して1980年に生誕記念碑が設置された(写真1)。オルテガは1910年4月7日にローサ(1884-1980)と結婚し、スルバノ通り22番地に新居を構え、11月には28歳の若さでマドリード大学の教授(形而上学)に任命される(写真2)。しかし、翌11年1月から12月まで妻を引き連れドイツ・マールブルク大学に留学し、長男ミゲル(1911-2006)の誕生、そして維持していた新居に戻り、本



写真1 オルテガの生家にある記念碑



写真2 新婚時代を過ごした家



写真3 家族が増えて引っ越した家



写真4 「西欧評論社」の事務所があった長男の自宅

格的な授業は1912年1月からとなる (José Ortega Spottorno 2002: 199-201; Miguel Ortega 1983: 35-6; Soledad Ortega 1983; 30, 282)。その後は、1914年に長女ソレダート (1914-2007)、16年には次男スポットルノ (1916-2002) が誕生したため、スルパノ通りの家は手狭になりセラノ通り47番地 (現在53番地) に引っ越している (José Ortega Spottorno 2002: 201) (写真3)。この時期に代表作である『無脊椎のスペイン』(1922)『現代の課題』(1923)『大衆の反逆』(1930) が書かれている。その後1931年には子供たちの成長によりこの家も手狭になったため、ベラスケス通り120番地に引っ越した。(Miguel Ortega 1983: 104)。1936年から1945年までスペイン内戦に伴う亡命生活によってスペインを離れていたが、亡命生活の最後に過ごしたリスボンから帰国し、息子たちの家に居候する。バルバラ・デ・ブラガンサ通り12番地の長男の家は「西欧評論社」⁵⁾の事務所としても使われており、小島威彦 (1903-1996) もオルテガに会いにこの家を訪れている (写真4)。小島はオルテガが亡くなる半年ほど前の1955年4月29日に日本での講演を依頼するために訪れるが、残念ながらオルテガは高齢と体調不良を理由として辞退した (小島 1956: 58 ; 1996: 327 ; Takehiko Kojima 1987: 137)。晩年は1948年より亡くなるまでモンテエスキンスア通り28番地の家に住んでいた (写真5)。

3.2 関連する場所

オルテガが住んでいた家々以外にも関連する場所はいくつもある。まずは、オルテガ財団 (Fundación José Ortega y Gasset-Gregorio Marañón) で



写真5 晩年を過ごした家

ある(写真6)。オルテガ研究の総本山であり、関連する資料や論文を保管しており、1978年に長女ソレダドによって創設され、現在は彼女の長男が所長を務めている。扉を開けると目の前に階段があり、それを中心として左右対称に部屋がある。右側の部屋が資料室と閲覧室である。資料室では職員が世界中から集められたオルテガの翻訳本の登録作業や発行している雑誌の編集作業を行っている。もちろんここには、『大衆の反逆』をスペイン語から翻訳した神吉敬三本人が寄付した日本語版がある。本棚は資料室を取り囲むようにしてコノ字に設置された中二階の渡り廊下に配置してある。そして、地下も書庫となっており入り口左側の部屋と地下で繋がっている。室内の至る所にオルテガの写真や肖像画が飾られその面影を感じることができる。敷地内には1985年の没後30周年に制作されたオルテガの胸像がある(写真7)。この近くにはオルテガの名前を冠した「オルテガ通り」(Calle de José Ortega y Gasset)があるが、オルテガの名



写真6 オルテガ財団



写真7 オルテガの胸像



写真8 「オルテガ通り」のプレート



写真9 オルテガの銅像



写真10 オルテガと家族が眠る墓

前を付すにあたっては、死後10日もしないうちに市議会によって決定された⁶⁾。また、教授を務めたマドリード・コンプルテンセ大学人文哲学科の建物の前には銅像がある。そして、旧市街の南に位置するサン・イシドロ墓地にはオルテガと家族が眠る墓がある(写真8)(写真9)(写真10)。

4. おわりに

以上のように、ABC紙の「オルテガ追悼特集」に注目し一般市民目線から見たオルテガという人物像を示した。そして、筆者が2013年から2018年にかけて計5回にわたってマドリードにあるオルテガに関連する場所を訪れた記録として報告した。4回目には2016年10月から2017年5月

まで滞在し、後半の4か月間はオルテガ財団の目の前のアパートに住んでおり、この間にも新しく分かったことがあるたびに関連する場所を訪れた。今回扱った場所以外にもまだまだ関連する場所はあるが紙面の都合で省略した。生涯を通してオルテガはマドリードに長く住み、現在でも関連する場所が数多く残されていることから、オルテガの影響力がマドリードというひとつの街に内包されているのが分かった。今後のオルテガ研究の発展を期待して訪問レポートとして報告した。

注

- 1) 息子たちでは、(José Ortega Spottorno 2002) (Miguel Ortega 1983) (Soledad Ortega 1983) がある。このほか主なものでは、José Luis Abellánの『*Ortega y Gasset y los Orígenes de la Transición Democrática*』(2000)やJordi Graciaの『*Jose Ortega y Gasset*』(2014)がある。また、1983年出版の「西欧評論」(*Revista de Occidente*, N°24-25)ではオルテガ生誕100年を記念した特集が生まれ、総勢24名の弟子や友人たちが寄稿し思い出をつづっている。
- 2) マドリード自治州文化・観光・スポーツ省が発行する小冊子の1冊で、当時のマドリードの街並みの写真やオルテガの写真など掲載された160ページほどの本である。しかし、残念ながら非売品のため、直接事務局に行かないと手に入らない。また、監修のJ・Z・ポニージャは筆者が2013年に初めてオルテガ財団に連絡をした際に返信してくれた人であり、訪問時に実際に会った。しかし、訪問した各年で見かけるが、初訪問時を最後に話すことは無かった。
- 3) ABC紙以外にもMADRID紙PUEBLO紙Informaciones紙Arriba紙ya紙がオルテガの死を報じ、おおむね「スペインの偉大な知識人をなくした損失は計り知れない」といった内容である。これらの一次資料は、オルテガの弟子であったディエス・デル・コラルの膨大な資料の一部である。筆者は、家族によってCEU San Pablo大学に寄付されたコラルの資料の閲覧を許可された。
- 4) 「新たな動き」とは、翌56年2月にファランへ党公認学生集団であるSEUとオルテガに影響を受けていた反フランコ体制学生集団FUEによる大学内での衝突のことである。
- 5) 「西欧評論社」(Editorial Revista de Occidente)とは1924年にオルテガが創設した出版社であるが、すでにその前年には現在まで発行が続く雑誌、「西欧評論」(*Revista de Occidente*)を発行していた。「西欧評論」については出版され

ていた時期で4つに分かれており、それぞれ第1期1923年～1936年、第2期1963年～1975年、第3期1975年～1978年、そして第4期1980年～現在である。

- 6) 10月28日に行われた市議会で名前を付すに対して感謝の意を表明した家族の手紙が市長によって読み上げられた。(ABC ,29,10,1955 「La Calle de Lista llevara el Nombre de Jose Ortega y Gasset」より) ABC紙デジタルアーカイブ版、「ABC Hemeroteca」(<http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1955/10/29/035.html>)

文 献

- Chamizo Domínguez, Pedro José, 2002, *Ortega y la Cultura Española*, Madrid: Ediciones Pedagógicas.
- Lizcano, Pablo, 1981, *La Generación del 56 — La Universidad Contra Franco*, Barcelona: Ediciones Grijalbo, S.A.
- Morán, Gregorio, 1998, *El Maestro en el Erial — Ortega y Gasset y la Cultura del Franquismo*, Barcelona: Tusquets Editores, S.A.
- Ortega Spottorno, José, 2002, *Los Ortega*, Madrid: Santillana Ediciones Generales, S.L.
- Ortega Spottorno, Miguel, 1983, *Ortega y Gasset — Mi Padre*, Barcelona: Editorial Planeta.
- Ortega Spottorno, Soledad, José, 1983, *José Ortega y Gasset — Imágenes de una Vida 1883-1955*, Madrid: Ministerio de Educacion y Ciencia Fundacion José Ortega y Gaaset.
- Takehiko Kojima, 1987, “Díez del Corral en el Japón,” M.^a Carmen Iglesias ed., *Historia y Pensamiento Homenaje a Luis Díez del Corral Tomo 2*, Madrid: Ediciones de la Universidad Complutense, S.A, 137-141.
- 小島威彦, 1956, 「オルテガ、マルセル、ハイデッガー」『理想』理想社 (273) : 58-65.
- , 1996, 『100年目にあけた玉手箱—第6巻地中海』創樹社.
- 小山義博, 2015, 「マドリード: オルテガ紀行—オルテガゆかりの地を訪ねて」『ソシオロジクス』日本大学大学院社会学研究会, (37) : 22-7.